それが概念的思考を可能ならしめるのだが、それはさらに進んだ段階では科学的思想を生ぜしめることになるというのである。[21] しかしこの宗教—宇宙論—科学思想の関係にはまだ明かではない点が残されている。しかしその点は本論の中心問題ではないから、これ以上これにふれることはしない。「宗教生活」がおける宗教に関する問題追及は知識社会学にとって真に重要なものではないことを W. S. F. Pickerling はくり返して明言する。ただデュルケームの著作の場合共通する点は両者がいずれも未開社会に大きくかかわり合っていることである。しかしそれでも未開社会をどのように見るかについても1903年の「分類」では人間の分類活動が根本的には社会生活つまりオーストラリアで明かにされた「トーテム社会の枠、その社会組織の二分法によって規定されている点であり、「宗教生活」はトーテム組織を宗教生活の要素的形態と見て、この要素的な形態を通じて今日の社会のあり方を明確に把握できるという方法論的要請に基づいているのである。だから、W. S. F. Pickerling はこの「デュルケームの概念思考の起源」の結論において次のようにのべているのである。[22]

デュルケームの知識社会学は直接にはカントによって設定された問題から生じている。デュルケームの理論は明示的にカントの合理的範疇の社会学である。彼の社会学は啓蒙思想に対する二律背反と二分法に基礎をおいているが、それらを社会学によって超克しようとしたもので、その中心に社会を独特なもの（*sui generis*）とする見方がある。（これは多くの合理主義者によって排撃されたが）、しかし別の点でも彼は宗教を表象とくに抽象的範疇の本質を理解するのに決定的なものとしながら合理主義者の基準に合致することに失敗した。最初彼は未開的範疇つまり分類を社会構造と関係づけようとして出発した。そして分類と社会ととの真の結合と見られるものを明かにして大きな独創性を発探し、実り多い道を選んだ。分類の社会学は宗教への準拠なしにも確立された。彼は何故この道を進まず、さらに範疇が社会構造と関連することを明かにする試みをやめたのか、それはカント的な考え方のすべきことだったのであろう。ところが彼は未開人がいかに考えるだけでなく、いかに抽象的概念ととりくむかを理解する要因として宗教に依拠しようとした。こうして彼は明白に反合理主義の道をすてて、万能薬宗教を永年の問題をとく鍵としてとりいれられた。そこで核心となるのは宗教の社会的要素である。しかしそれは循環論法を仮定することになる。デュルケームの著作から明白なことは表象を扱う知識社会学は彼の社会学の中心に立つものである。[23] だから結局デュルケーム社会学はすべて知識社会学であり、それは論理的には信（Belief）の社会学になっていく。それ故そこに彼の宗教社会学（「宗教生活」に展開された）に大きな転換が生じることになる。Pickerling はだからその著 *Durkheim's Sociology of Religion*,（1984）において指摘したように、[24] 特に「宗教生活」において宗教的事物に関して論述していることから明かに知られる大きな関心が彼の弟子たちにとってはかえって当惑の的となっていたことは疑いないことであるとのべ、デュルケームが多くの研究者により宗教を社会生活の万能の鍵と見たことは行きすぎであると感じているという。[25] こうして Pickerling は「分類の未開形態における知識社会学的考察は「宗教生活」における宗教的現象の解明とは必ずしも同一次元の問題ではないと結論するのである。たしかに「宗教生活」の序文では両者の結びつきを示唆するような書き方が見られるが、それは宗教現象を説明するための不可欠のものとは見られないだけではなく、両者の間の論理的結びつきも明白ではない。Pickerling はこのことを

21）W. S. F. Pickerling, *op. cit.*, p. 60
W. S. F. Pickerling, *op. cit.*, p. 61（この点はデュルケームの宗教生活の結論において詳論されている）

22）W. S. F. Pickerling, 'The origin of conceptual thinking in Durkheim, in Emile Durkheim, *Sociologist and moralist*. p. 66–67 の要約

23）この一文は Vogt, 'Early French coutributions to Sociology of knowledge' *Research in the Sociology* of Knowledge, Science and Art ; 11（1979）p. 101–21

24）W. S. F. Pickerling, *Durkheim's Sociology of Religion*, chap. 27

25）W. S. F. Pickerling, 'The origin of conceptual thinking in Durkheim, p. 67